



13 巖頭猛虎図 川合玉堂 一幅

昭和前期 紙本墨画 本紙七七・八×九六・七

描かれるのは、まさに虎視眈々の言葉通り、岩に前脚をかけながら身を低くかがめ、獲物を狙う一頭の虎である。川合玉堂（一八七三―一九五七）は、京都で望月玉泉、幸野樸嶺に絵を学び、円山四条派の画家として活動していたが、その玉堂に大きな衝撃を与えたのが、虎の絵であったことは有名である。明治二十八年（一八九五）に京都で行われた第四回内国勸業博覧会において、橋本雅邦の「龍虎図屏風」（静嘉堂文库美術館蔵）を目にした玉堂は、その迫力に圧倒され、意を決し流派の異なる狩野派の雅邦に弟子入りしたのである。雅邦は龍虎を得意の画題としており、明治三十三年のパリ万博にも「龍虎図」（当館蔵）を出品して銀牌を獲得している。玉堂は、師のもとでこうした絵の制作を目の当たりにしていたことになる。その後玉堂は、次第に雅邦の画風からも離れ、詩情豊かな風景画を多く描くようになっていくが、昭和十年代には墨画の虎を頻繁に描いている。画風、および落款の書体から、本図も同様にその時期の作と考えられる。一気呵成に描き上げた筆運びで、勢いよくひかれた刷毛目が、この墨絵の虎に生命力を与えている。

玉堂は昭和十九年（一九四四）からは香淳皇后の絵の指導もつとめており、本図も香淳皇后の御遺品として伝えられたものである。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

## 虎・獅子・ライオン

— 日本美術に見る勇猛美のイメージ

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 51

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十二年七月十七日発行

© 2010 The Museum of the Imperial Collections